新　刊

□国立科学博物館（編）：**南太平洋のシダ図鑑**　B5 296 pp．2008．￥8,200．東海大学出版会．ISBN: 978-4-486-01792-9.

日本シダの会・南太平洋シダ研究会（会長中村武久氏）が1993年以来行ってきたニューカレドニア，バヌアツ，フィージー，サモアの調査と，国立科学博物館筑波実験植物園で行ったバヌアツ調査の結果得られた計8,700点の標本が，同館植物標本庫に収蔵された．その整理の過程で，前記研究会のメンバーが主体となって，この地域のシダ植物図鑑が企画され，会員の手による作図と検索表の作成が行われた．科ごとに属および種類の検索表が和文と英文で示され，総計29科約580種類の名前が挙げられている．

種類の解説は簡潔で，上記4地域における記録と標本の有無を示すロゴマーク，図番号，地域記号，図に用いた標本番号がある．図は作者により筆使いの差が多少あるものの，いずれも見事な出来映えで，一部の拡大図を除いて一々スケールバーが添えられている．

新学名は，組み換えを含めて扱われていない．明らかに既存タクソンと区別できるものについては，sp. 1，sp. 2，あるいはA型，B型というような表示が使われていて，後日の研究に委ねられている．最後に，この地域の研究略史と参考文献がある．植物観察の海外旅行は今や茶飯事であるが，その結果を全国に広がる会員が協力してまとめ，学的成果として記録に留めた努力は高く評価されるだろう．

（金井弘夫）

□変わりゆく信州の自然編集委員会（編著）：**変わりゆく信州の自然**　B5 142 pp．2008．￥1,500．ほおづき書房．ISBN: 978-4-434-11557-8.

長野県環境保全研究所のスタッフが一年間に渡って新聞紙上に連載した記事をまとめたものである．第1章貴重な動植物とレッドデータブック，第2章外来種の何が問題か，第3章人と自然の関わり，第4章多様な環境変化の主題の下に，1章ではカタクリ，ナニワズ，ヒメザゼンソウ，オキナグサ，トガクシソウ，ミズオオバコ，コマウスユキソウ，ヤシャイノデ，ホシツリモ，2章ではセイヨウタンポポ，アレチウリ，ニセアカシア，オオカワヂシャが話題にされている．3，4章では，人間活動による影響と地球規模の気候変化があいまって起こる多種多様な被害や異状現象およびいろいろな対処策が論じられている．その中で，県下の民有林のカラマツ植栽は昭和23年頃から急増し，44年頃から急減したという記事があった．私が毎年実習に出かける黒姫付近にはコナラの立派な林があるが，その根元を見ると，萌芽更新を続けた株が40，50年前から放置されて成長したことを思わせ，上の傾向を裏付けているように思う．一方，それに混じって成長していたシラカバやウリハダカエデが，次第に枯死してコナラの優勢が強まる一方，コナラの実生は毎年大量に発生しながら翌年春まで生き残らないことを繰り返しており，遷移がどのように進むのか図りかねる．差し当たり解決せねばならない問題と共に，長期的な継続観察の必要性を感じる．

（金井弘夫）

□清水矩宏，森田弘彦，廣田伸七：**日本帰化植物写真図鑑**　B6 554 pp．2007．￥4,300．全国農村教育協会．ISBN: 4-88137-085-5.

1971年刊行の本書は，2007年で第4刷となった．600種類の帰化植物が解説を伴って1ページに1，2種類ずつカラー写真で示され，記録の出典とそのページが記されている．帰化植物は単なる外来品という見方から，最近は在来フロラを質的に撹乱するという面が注目されるようになった．一方，その消長の激しさから，一度記録された地点にいつまでも存在しているかどうかがはっきりせず，繰り返し調査する必要が感じられる．

19のグループについて，類似植物の見分け方が解説されている．各所に1，2ページを割いたコラムで26のトピックが紹介されており，参考になる．例えば，一年生のイチビの種子は地下30 cmほどまではほぼ均一に分布しているが，発芽するものは4 cm程度の深さまでが大部分を占め，毎年落下した種子に加えてトラクターによる耕起の結果入れ換えが起こる．そして個々の種子の寿命は20年以

上もあるという．このことは，自然における遷移を考える上でも重要なヒントになるだろう．

最後の部分に，輸入穀物から検出された雑草種子（散布体）の問題が多くの写真と共に述べられている．輸入時の薫蒸処理では種子を殺すことはできないとのこと．輸入大国としては，外来植物の問題が簡単ではないことを示している．（金井弘夫）

□渡邊高志：**ヒマラヤの薬草・秘宝を守れ** 21×26 cm 224 pp．2008．￥2,500．アップフロントブックス（発行），ワニブックス（発売）．ISBN: 978-4-8470-1764-4．

この表題の前に「自然と人との生活を感じる旅へ」という前置きがついている．著者はヒマラヤの薬用植物資源の開発を，現地住民との協調のもとに行うべく，ネパール，ブータン，パキスタンで活動してきた．その計画と成果の紹介と共に，これら地域の人々の生活をも紹介するものである．

地域的にはムスタン，ネパール，ブータン，パキスタンと分けて，それぞれの地域の様子がかいつまんで記されており，最後に（116–127ページ）著者らが行っている現地での人材育成事業，植物インベントリー調査研究スキームの紹介がある．これらの部分は読ませることより見せることに重点があるようで，非常に多くの（約300点）美しいカラー写真で，現地の生活や景観が紹介されている．ただ，説明がついているものは約半数しかなく，前置きの趣旨からすると，これはもったいない．

一方，植物プロパーとしては，「ヒマラヤの花と植物」（46–57ページ）および「ヒマラヤの薬草108」（148–168ページ）に植物名と番号付の写真が計175点あり，その説明がそれぞれ207–223ページおよび169–206ページにある．前のグループはその中が園芸的な価値がある，薬用植物とか，有毒植物とか，いくつかのトピックでまとめられているが，前後の文脈からみてとくに関係がなく，「薬草108」にまとめた方がスッキリしたのではないか．というのは，どちらの説明も生薬学的記述が主体であり，同じ種類にはほとんど同じ文が使われているからである．なお，53ページのペルシャアカシア（本書ではネムノキをこう呼んでいる）は *Calliandra* ではあるまいか．ワニブックスの連絡先は，150-[illegible] 東京都渋谷区[illegible]（Tel. [illegible]）．（金井弘夫）

□Ridsdale C., White J. and Asher C.（著），杉山明子，清水晶子（訳）：**樹木** 20×13 cm 360 pp．2007．￥2,800．新樹社．ISBN: 978-4-7875-8556-1．

私には本書編纂の方針がいまいちつかめないのだが，人間生活における樹木の経済的，感性的有用性を解説することによって，樹木についての理解を深めさせようと意図したものと理解する．章立ては，樹木とはなにか？，生活の中の木，世界の樹木と分けてあるが，前2章は説明文を中心に61ページを占め，最後の章が大部分で約500種類の解説である．1ページに数種類のカラー写真と説明があり，食用を主とした有用植物と，花を主とした鑑賞植物で占められている．多くの名の知られた有用植物を網羅しているので，形や性質を簡単に索くことができるという点で役に立つ．（金井弘夫）